

まず全体をキープに

◀協定書を交わす佐々木市長と福原学長（右）



平成十六年二月に、旧美山町が佛教大学と交わした連携協定が、このほど、南丹市に拡大。新たに調印式が行われました。これにより、教育、福祉、産業などさまざまな場面で、地域住民とのふれあいを通じて若者が学び、まちづくりに参画する取り組みがスタートしました。

南丹市と佛教大学は十一月二十二日、まちづくりや教育、研究活動で相互協力する地域連携協定に調印しました。

佛教大学は、旧美山町と平成十六年二月に協定を交わし、社会学部を中心に、文・教育・社会福祉の全学部を挙げてフィールドワーク、演習、社会調査活動、伝統文化行事への協力をしようと、地域行事への参加やまちづくり講座などの開催などで、交流を続けてきました。今回の調印は昨年一月に南丹市が誕生したのを受けて、協定の範囲を南丹市に広げることになったものです。

調印式は、京都市北区の佛教大学で行われ、佐々木稔納市長と福原隆善学長が協定書

を交わしました。

旧美山町の時からまち全体を佛教大学のキャンパスととらえた活動で、まち全体を視野に入れた地域連携の取り組みは全国でも珍しく、今後、幅広い分野で、市民と研究者、学生の交流拡大を目指していきます。

美山でフォーラム

南丹市美山文化ホールで十一月二十六日、フォーラム「美山の魅力と可能性」が開かれました。これは、美山まちづくり委員会と佛教大学が連携して初めて開いたものです。農業マーケティング研究所の山本和子所長が基調講演を行い、「美山ブランドを生かして、



▲美山文化ホールで行われたフォーラム

ある程度の収入につながるような仕事をつくり出す努力が必要」と訴えました。

続いて佛教大学の野崎教授が進行を務め、四人のパネリストが話し合いをしました。

「美山の豊かな自然と食を生かして、産学公民の連携を」 「田舎の取り組みを都市の人知ってもらうことがまちおこしにつながる」といった提言が続いたほか、旅を通して環境問題を考えるエコツーリズムが提言されるなど、今後のまちづくりに生かそうと参加者は美山の魅力と可能性について探り合っていました。